[head](file:///E:\岩倉紙芝居\koten\koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。  
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。  
  
　   
  
、、、、、、、、、、、、、、、　孫子曰く、およそ兵を用（もち）うるの法は、国を全（まっとう）するを上（じょう）となし、国を破（やぶ）るはこれに次（つ）ぐ。軍を全（まっとう）するを上となし、軍を破るはこれに次ぐ。旅（りょ）を全（まっとう）するを上となし、旅（りょ）を破るはこれに次ぐ。卒（そつ）を全（まっとう）するを上となし、卒（そつ）を破るはこれに次ぐ。伍（ご）を全（まっとう）するを上となし、伍（ご）を破るはこれに次ぐ。このゆえに、百戦（ひゃくせん）百勝（ひゃくしょう）は善の善なるものにあらざるなり。戦わずして人の兵を屈（くっ）するは善の善なるものなり。  
■兵を用い戦わずして国を得るを全国、戦いて国を得るを破国とする。■『司馬法』　二十五人を兩と為し、四兩を卒**と**為し、百人なり。五卒を旅と為し、五百人なり。五旅を師と為し、二千五百人なり。五師を軍と為し、萬二千五百人なり。（伍は五人　五伍を兩と為す）　全軍は戦わずして敵軍を降伏させること、破軍は戦って敵軍を破ること。以下、同じ。■不戰而屈人之兵　戦わずして敵を屈服せしめ、自軍に取り込むこと。戦って勝ち目はない、付き従った方が得策と思わしめることが最上、最善とする。戦う前の謀、平成の言葉で云えば、外交において、相手の狙いを的確に捉え、それを打ち砕く状況を構築することを重要視する。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、ゆえに上兵（じょうへい）は謀（ぼう）を伐（う）つ。その次は交（こう）を伐（う）つ。その次は兵を伐（う）つ。その下（げ）は城を攻（せ）む。城を攻（せ）むるの法はやむを得えざるがためなり。櫓（ろ）・轒轀（ふんおん）を修め、器械（きかい）を具（そな）うること、三月（みつき）してのちに成る。距闉（きょいん）また三月（みつき）にしてのちに已（おわ）る。将（しょう）その忿（いきどお）りに勝（た）えずしてこれに蟻附（ぎふ）すれば、士を殺すこと三分の一にして、城の抜（ぬけ）ざるは、これ攻の災（わざわい）なり。ゆえに善く兵を用うる者は、人の兵を屈（くっ）するも、戦うにあらざるなり。人の城を抜ぬくも、攻むるにあらざるなり。人の国を毀（やぶ）るも、久しきにあらざるなり。必ず全（まった）きをもって天下に争う。ゆえに兵頓（つか）れずして利全くすべし。これ謀攻（ぼうこう）の法なり。  
■上兵　兵法の上、次、次、下の区別。■伐謀　相手の謀を察知して阻害す。■伐交　敵国や敵将が他国や他将と合力すを阻害す。孤立化す。■伐兵　この兵は解釈が分かれる。兵の陣取り、櫓・轒轀などの器械や距闉などの構築物、糧や退路を断つなどが議論される。器械については、攻城術（[戦車一](http://thnf-web.vm.nthu.edu.tw/history/shows/show01/sung.siege/offence-b02.html)、[戦車二](http://thnf-web.vm.nthu.edu.tw/history/shows/show01/sung.siege/offence-b01.html)、[雲梯](http://thnf-web.vm.nthu.edu.tw/history/shows/show01/sung.siege/offence-b03.html)）を参照す。太公曰く、「必勝の道は器械を宝と為す」。■攻城　下策でやむを得ずすべきもの。蟻附は蟻（あり）が壁にへばりつく様。充分な攻城兵器無くして、人海戦法で壁を昇らせること。中国では都市が城壁で囲われており、壁を乗り越える、城門を砕く、地下道を掘るなど、攻城兵器無くして攻めることは、無謀。■屈　低頭、屈服、降伏のこと。■毀　破壊損害のこと。■頓　『左傳·襄四年』に、「甲兵不頓」、『註』して、頓は壞なり。正義曰く、頓は挫傷折壞を謂う、とある。■謀攻　相手の意図を封じ、分断し、勝機無きことを悟らせること。  
  
、、、、、、、、、ゆえに兵を用（もち）うるの法は、十なればすなわちこれを囲（かこ）み、五なればすなわちこれを攻（せ）め、倍（ばい）すればすなわちこれを分（わか）ち、敵（てき）すれば、すなわちよくこれと戦い、少（すく）なければすなわちよくこれを逃（のが）れ、若（し）かざればすなわちよくこれを避（さ）く。ゆえに小敵の堅（けん）は大敵の擒（きん）なり。  
■囲　城邑を囲む　四方を固め、糧道を断ち、援軍を断ち、孤立化させるには十倍の兵を要する。■攻めるには敵を分断する。正と奇に分け、五倍ならば正を三、奇を二とす。敵の三道に正を配し、敵の手薄となった所を二で奇襲する。二倍ならば、正一と奇一とし、正で戦い、背後を奇襲する。■敵には匹敵の義があり、敵手とは能力が等しい相手のこと。対等の敵と戦うならば、能く（力を尽くして）戦う方が勝つ。■少数であれば、逃げる。■勝てない相手は避ける。無理をして戦えば、捕虜となる。相手に対して優位に立てないならば、逃げるか避ける。ただ、堅く戦い捕虜となった将兵を味方の将兵として用いることがある。　  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、それ将（しょう）は国の輔（ほ）なり。輔周（しゅう）なればすなわち国必ず強し。輔隙（げき）あればすなわち国必ず弱し。ゆえに君（きみ）の軍に患（うれう）るゆえんのものには三あり。軍の進むべからざるを知らずして、これに進めと謂（い）い、軍の退（しりぞ）くべからざるを知らずして、これに退けと謂う。これを軍を縻（び）すと謂う。三軍の事（こと）を知らずして三軍の政（せい）を同じくすれば、すなわち軍士（ぐんし）惑（まど）う。三軍の権（けん）を知らずして三軍の任（にん）を同じくすれば、すなわち軍士疑（うたが）う。三軍すでに惑（まど）いかつ疑うときは、すなわち諸侯の難（なん）至る。これを軍を乱して勝（しょう）を引くと謂（い）う。  
■輔は輔佐のこと。周と隙を将の才の賢（周）と欠陥（隙）と解されるようである。君主と将の関係ではないか。周は隙の反、隙のないことであり、国の強弱は、君主と将がお互いの役割を自覚し、隙なく行動できるかにかかる。■君と将の間の隙がもたらす患は、縻、惑、疑の三つがある。■縻とは縛り付ける、束縛すること。将が好機と軍を進める時に君主が停止を命じる、あるいは迎撃、固守すべき時に、撤退を命じること。■惑とは戦時の論功を平時の規範で裁決すること。極端にいえば、敵を撃破する論功を、仁義礼智信で定めるがごとし。■疑とはその原因であり、権謀術策を知らない者を将に任じること。■この三者が起れば、国は混乱し、他の諸侯に攻撃をされる難を被る。■引勝とは潮が引く如く、勝が去って行くこと。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、ゆえに勝（しょう）を知るに五あり。もって戦うべきともって戦うべからずとを知る者は勝つ。衆寡（しゅうか）の用を識（し）る者は勝つ。上下（じょうげ）の欲を同じくする者は勝つ。虞（ぐ）をもって不虞（ふぐ）を待つ者は勝つ。将（しょう）の能（のう）にして君（きみ）の御（ぎょ）せざる者は勝つ。この五者（ごしゃ）は勝（しょう）を知るの道なり。ゆえに曰く、彼を知りて己（おのれ）を知れば、百戦（ひゃくせん）して殆（あやう）からず。彼を知らずして己（おのれ）を知れば、一勝（いっしょう）一負（いっぷ）す。彼を知らず己（おのれ）を知らざれば、戦うごとに必ず殆（あやう）し。  
■勝つために知らねばならぬこと五つあり。■彼我の戦力、情勢を量り、攻めるべきか、止まるべきか、退くべきか、守るべきかを知る。■兵の数の衆、寡のみならず、戦闘能力や士気の強、弱、地勢や天候などによる利、不利等その用い方を知る。■上意下達、下意上達であるか、上意不下達、下意不上達であるかを知る。■虞には、慮と準備。事前にこれが出来ているか出来ていないかを知ることは当然。待とあり、互角、不利であっても、情勢の変化で相手が不虞となることもある。よく己を保ち、その時を知る。■春秋時代では、諸侯は、元来親戚であり、婚姻関係で結ばれており、宮廷では双方の意向が交差する。君主は有能で忠誠心のある大夫を選び、軍事を委譲することが重要となった。この五つを知るというは、彼を知り、己を知るということである。そうすれば負けることはない。己を知っていても彼を知らねば負けることもある。彼、己を知らずに戦うのは無謀、危うい。  
  
**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）〈謀攻〉篇  
  
曹操曰く、敵を攻めむと欲（せ）ば、必ず先に謀る。  
李筌曰く、陳を合すを戰と為し、城を圍むを攻と曰う。此篇を以て〈戰；作戦篇〉の下に次ぐ。  
杜牧曰く、廟堂の上、計算已に定まり、戰爭の具、糧食の費、悉く已に用備われば、以て謀政（謀画政事）す可し。故に「謀攻」と曰う。  
王晳曰く、敵の利害を謀攻すは、當に策を全し以てこれを取る。兵を伐ち城を攻むに銳からず（はやるな）。  
張預曰く、計議已に定まり、戰具已に集まり、然して後に智を以て謀攻す可し。故に、〈作戰〉に次ぐ。  
  
（孫子曰：凡用兵之法，全國為上，破國次之；）   
曹操曰く、師を興し深く入り長驅し、其の城郭を距み（封鎖し）、其の內外（の連絡）を絕ち（孤立させ）、敵が國を舉げて來服すを上と為す。兵を以て擊破し、敗りてこれを得るは其の次なり。  
李筌曰く、殺を貴とせず。韓信は魏王豹を虜（捕虜）にし、夏說を擒（生け捕り）にし、成安君を斬りつ。此れ國を破る者と為す。廣武君の計を用うに及び、北に燕路に首（むか）い、一介の使を遣わし、咫尺の書（短文の書状）を奉れば、燕は風に從いて靡けり、則ち國を全（まっとう）すなり。  
賈林曰く、全て其の國を得れば、我國も亦全す。乃ち上と為す。  
杜佑曰く、敵國來服すを上と為す。兵を以て擊破すを次と為す。  
王晳曰く、韓信が燕を舉るが若き、是なり。  
何氏曰く、方略氣勢を以て、敵人をして以て國降らしむは、上策なり。  
張預曰く、尉繚子曰く、「講武（武事を講習す）料敵（敵情を衡量）し、敵をして氣を失わせて師を散ぜしむ。形を全すと雖も為さざる用となすは、此れ道（による）勝なり。軍を破り將を殺し、乘堙（城を攻む有為堙之法）發機（弩弓の發矢機を撥動）し、眾を會し地を奪う。此れ力（による）勝なり」。然り則ち所謂道勝、力勝は、即ち國を全す、國を破るの謂なり。夫れ民を弔い罪を伐ち、勝を全すを上と為す。已むを得ず為して破るに至るは、則ち其の次なり。  
  
（全軍為上，破軍次之；）   
曹操、杜牧曰く、『司馬法』に曰く、「一萬二千五百人を軍と為す」。  
何氏曰く、其の城邑を降し、我が軍を破らず。  
  
（全旅為上，破旅次之；）   
曹操曰く、五百人を旅と為す。  
  
（全卒為上，破卒次之；）  
曹操曰く、一校已下、一百人に至るなり。  
李筌曰く、百人已上を卒と為す。  
杜佑曰く、一校下、百人に至るなり。   
  
（全伍為上，破伍次之。）   
曹操曰く、百人已下、五人に至る。  
李筌曰く、百人已下を伍と為す。  
杜牧曰く、五人を伍と為す。  
梅堯臣曰：謀の大なるは、全てこれを得る。  
王晳曰：國、軍、卒、伍、小大を間せず、これを全せば則ち威德優と為し、これを破れば則ち威德劣と為す。  
何氏曰く、軍より伍に至り、皆（すべ）て次序、上下これを言う。此の意は策略以てこれを取るを妙と為す。惟だ一軍にあらず、一伍に至るまで、全すべから可からず。  
張預曰く、周制に、萬二千五百人を軍と為し、五百人を旅と為し、百人を卒と為し、五人を伍と為す。軍より伍に至り、皆て、戰わずして勝つ之を以て上と為す。  
  
（是故百戰百勝，非善之善者也；）   
曹操曰く、未だ戰わずして（敵が）戰（おのの）き自ら屈す、勝つに善し。  
李筌曰く、計を以て敵に勝つなり。  
陳皥曰く、戰えば必ず人を殺すが故なり。  
賈林曰：兵威が遠く振い、全て來りて降伏す、斯を上と為す。詭詐（きさ）し謀を為し、敵眾を摧破（さいは）し、人を殘（そこな）い物を傷（そこな）い、然る後にこれを得るは、又其の次なり。  
杜佑曰く、未だ戰わずして敵自から屈服す。  
梅堯臣曰く、殺傷殘害すを惡（にく）む。  
張預曰く、戰いて後に能く勝つは、必ず多く殺傷す、故に、善に非らずと云う。  
  
（不戰而屈人之兵，善之善者也。）   
曹操曰く、未だ戰わずして敵自から屈服す。  
杜牧曰く、計を以て敵に勝つ。  
陳皥曰く、韓信、李左車の計を用い、咫尺の書を馳せ、戰わずして燕城を下す。  
孟氏曰く、廟勝を重んず。  
王晳曰く、兵は伐謀（敵の謀を伐つ）を貴びて、戰を務とせず（勧めず）。  
何氏曰：後漢の王霸は周建、蘇茂を討ち、既に戰いて營に歸す。賊復（また）聚りて挑戰す。霸は堅く臥して出でず。方に士を饗し倡樂（歌舞音曲）を作（な）す。茂が雨射す營の中（軍営に敵矢が降り注ぐ）、霸の前の酒罇に中（あた）る。霸は安じて坐し動かず。軍吏曰く、「茂已に破りて、今易く擊てり」。霸の曰く、「然らず。茂が客兵は遠來し、糧食は不足す。故に、挑戰し以て一切之勝を激す（早期の勝利を焦る）。今は營を閉じて士を休ましむ。所謂、戰わずして人の兵を屈すは、善の善なり」。茂は乃ち引き退る。  
張預曰く、賞罰を明らかにし、號令を信じ、器械を完し（十分に備え）、士卒を（訓）練し、其の長とする所を暴（あらわ）にせば、敵をして風に從い、靡かせしむ。則ち大善と為す。吳王の黃池之會の若し。晉人、其の法有るに畏れてこれに服すは、是なり。  
  
（故上兵伐謀，）   
曹操曰く、敵始めに謀有らば、これを伐つこと易し。  
李筌曰く、其の始めに謀を伐つ。後漢の寇恂、高峻を圍む。峻は謀臣の皇甫文を遣わして恂に謁す。辭禮、屈さず。恂はこれを斬り、峻に報じて曰く、「軍師は無禮にして已にこれを斬りぬ。降(伏)すを欲せ。急（すみやか）に降れ。欲さねば、固く守れ！」峻は即日、壁を開きて降る。諸將曰く、「敢えて問う、其の使を殺して其の城を降（くだ）すとは何ぞ？」恂曰く、「皇甫文は峻が心腹す。其れ謀者を取り、これを留めば、則ち文は其の計を得る。これを殺せば、則ち峻は其の膽を亡す（肝をつぶす）、所謂、上兵は謀を伐つ、なり」。諸將曰く、「知る所に非ず（分からなかった）」。  
杜牧曰く、晉の平公、齊を攻めんと欲（し）、范昭（はんしょう）をして往（ゆ）きてこれを觀せしむ。景公はこれを觴（もてな）す。酒酣（たけなわ；盛り）にして、范昭は君の罇酌（飲酒の器）を請う。公の曰く、「寡人之罇（私の酒器）を客に進めよ」。范昭が已飲（飲み終わると）、晏子は徹罇（公の酒器を回収し）更めて（別の酒器で）酌をす。范昭は佯醉（酔った振りを）して、悅ばずして起（た）ちて舞はんとして、太師に謂りて曰く、「能く我が為に成周の樂を奏さんか？吾はこれを舞わんと為（す）」。太師が曰く、「瞑臣にして習わず」。范昭は趨りて出ず。景公の曰く、「晉は大國なり。來りて吾が政を觀ん。今、子は大國の使者を怒らせる、將に奈何とす？」晏子が曰く：「范昭を觀るに、禮に陋に非ざる（礼に通じた）者。且（また）國を慚（はずかし）めんとす。臣は故に、從わず」。太師が曰く、「夫れ成周の樂は、天子の樂なり。惟に人主がこれを舞う。今、范昭は人臣にして、天子の樂を舞わんと欲（す）。臣は故に、為さず」。范昭は歸りて、晉の平公に報じて曰く、「齊、未だ伐つ可からず。臣が其の君を辱しめんと欲（す）も、晏子はこれを知る。臣が其の禮を犯さんと欲（す）も、太師これを識る」。仲尼の曰く、「罇俎（酒器食器；宴席）の間を越えず、而して千里の外に折衝す（遠国の敵意を砕く）。晏子の謂なり」。春秋の時に、秦が晉を伐ち、晉の將の趙盾がこれを禦ぐ。上軍の佐（将の下、尉の上、参謀）の臾駢（ゆべん）が曰く、「秦は久しくすること能わず。請う、壘を深くし軍を固めてこれを待つを」。秦人は戰わんと欲（す）。秦伯は士會に謂りて曰く、「若何而戰（いかにして戦わん）？」對えて曰く、「趙氏は新たに其の屬を出し、臾駢と曰う。必ずや實に此の謀を為さん。將（まさ）に以て我が師（軍）を老（疲労）せしめんとす。趙には側室有りて穿と曰う、晉君の婿なり。寵有るも弱く、軍事在らず、勇を好みて狂し、且つ臾駢が上軍を佐すを惡（にく）む。若し輕者をして肆せしめば、其れ可なり（穿を挑発しおびき出す）」。秦軍は晉の上軍を掩（おそ）う。趙穿はこれを追うも及ばず、返りて怒りて曰く、「糧を裹（つつ）み甲を坐（お）く、固より敵は是を求む。敵至りて擊たず、將に何をか俟たん？」軍吏が曰く、「將に待つこと有らん」。穿が曰く、「我は謀を知らず。將に獨り出ず！」乃ち其の屬を以て出ず。趙盾曰く、「秦が穿を獲れば、一卿を獲たりて、秦は以て勝ちて歸る。我何を以て報ぜん？」乃ち、皆出でて戰う。交綏（こうすい、双方が軍を引く）して退く。夫れ晏子が對（対応）、是は敵人が將に我を伐つを謀り、我が先に其の謀を伐つ。故に、敵人は我を伐つことを得ず。士會が對、是は我將に敵を伐つを謀り、敵人に我を拒む謀有りて、乃ち其の謀を伐つ。敵人は得ず我と戰う。斯の二者は、皆て謀を伐つなり。故に、敵が我を謀らんと欲（せ）ば、其の未形の謀を伐つ。我が敵を伐つが若きは、其の已に成る計を敗る、固より一に止むに非ず（対応は臨機応変たれ）。  
孟氏曰く、九たび攻めるも九たび拒む（墨子）。是は其の謀なり。  
杜佑曰く、敵が方（まさ）に謀を設け、眾師を舉げんと欲（せ）ば、（その謀を）伐ちて抑う。是は其の上。故に太公云く、「善く患を除くとは、未だ生ぜぬ（うちに事を）理（おさ）む。善く敵に勝つとは、形無くして（敵が布陣する前に討ち）勝つ」なり。  
梅堯臣曰く、智を以て勝つ。  
王晳曰：智謀を以て人を屈すを最も上と為（す）。  
何氏曰：敵が謀を始め我を攻むならば、我が先にその謀を攻むが易し。敵人の謀の趣向を揣知（探知）し、因りて兵を加え、其れ彼の心に發すを攻む。  
張預曰く、敵が謀を始發す。我は從（よ）りてこれを攻めば、彼は必ず計を喪（うしな）いて屈服す。晏子が范昭を沮（こば）むが若き、是なり。或ひと曰く、「謀を伐つとは、謀を用いて以て人を伐つなり」。言うは、奇策祕算を以て（相手を出し抜く策を胸中に隠し）、戰わずして勝を取る。兵の上なり。  
  
（其次伐交，）   
曹操曰く、交（親交）とは將（まさ）に合（合力）なり。  
李筌曰く、其れ始交を伐つなり。蘇秦は六國と約して秦に事（つかえ）ず。而して秦は關を閉じること十五年、敢えて山東を窺（うかが）わず。  
杜牧曰く、將が合すを止むのみに非ず。合す者は皆伐つ可し。張儀は秦地六百里を楚の懷王に獻ずを願い、齊との交を絕つを請う。（漢の）隨何（ずいか）は黥布（げいふ）の坐上で楚の使者を殺し、以て（楚の）項羽と絕たしめた。曹公と韓遂は馬(上で)語を交（かわ）し、以て馬超を疑わしむ。高洋（北斉の文宣帝）は蕭深明（蕭淵明）を以て梁に和を請わし、以て侯景を疑わしめ、終（つい）に臺城を陷す。此れ皆て交を伐てり。權道の變化は、一途に非ず。  
陳皥曰く、或ひと云く、敵が已に師と合を交（かわ）し、伐ちてこれに勝つは、是其の次なり。晉の文公が宋に敵し、曹、衛を攜離（離心，背叛）せしむが若（ごと）し。  
孟氏曰く、合を交せば國を強くし、敵は敢えて謀らず。  
梅堯臣曰く、威を以て勝つ。  
王晳曰く、謂うは、未だ能く全て敵の謀に屈せず、當に且つ其の交を間（離間）し、これを解散せしむべし。彼（か）が交すれば則ち事は鉅（はがね、強固で大）となり敵は堅し。彼が交せずんば則ち事は小であり敵は脆い。  
何氏曰：杜（牧）は已上の四事を稱す。乃ち「親せばこれを離す」の義なり。交を伐つは、兵は合を交わすを欲すも、疑を設けば兵は以てこれを懼れ、進退しむるを得ず、因りて來りて屈服す。旁鄰も既に我が為に援し、敵は孤し弱せざるを得ず。  
張預曰く、兵將に交戰す。將に合せば則ちこれを伐つ。『傳（左伝）』に曰く、「人に先んずは、人の心を奪うに有り」。謂うは、兩軍將に合せば、則ち先じてこれを薄くす。孫叔敖（そんしゅくごう）が晉の師を敗り、厨人の濮が華氏を破るは是なり。或ひと曰く、交を伐つは、交を用いて以て人を伐つ。言うは、兵を舉げ敵を伐たんと欲（せ）ば、先ず鄰國と結び犄角之（敵を挟撃する）勢を為せ。則ち我は彊くして敵は弱し。  
  
（其次伐兵，）   
曹操曰く、兵の形己に成ればなり。  
李筌曰く、敵に臨み陳（敵陣）に對ずは、兵の下なり。  
賈林曰く、攻めて取るに善く、遺策（失策）無きを舉ぐは、又其の次なり。故に、太公曰く、「白刃の前に爭いて勝つは、良將に非ず」。  
梅堯臣曰く、以て戰いて勝つ。  
王晳曰く、戰うは危き事。  
張預曰く、其の始謀を敗り、其の將が合すを破ること能わずんば、則ち犀利（鋭利）の兵器で以てこれに勝て。兵は器械の總ての名なり。太公曰く、「必勝の道は器械を寶と為す」。  
  
（其下攻城。）   
曹操曰く、敵國已に其の外糧を收めて城守す。これを攻むを下政と為（す）。  
李筌曰く、夫れ王師、境を出で、敵則ち壁を開き款（親交）を送り、櫬（棺）を轅門（えんもん、軍門）に舉が、百姓怡悅（喜悦）すは、攻の上なり。兵を堅城の下に頓し、師は老（疲労）し卒は惰（鋭気を失）し、攻守が勢を殊（逆）にし、客主の力倍すが若し、此を以て攻むを下と為（す）。  
杜佑曰く、言うは、城を攻め邑を屠（ほふ、大量に殺す）る。攻の下なるは、害す所のもの多し。  
梅堯臣曰く、財役を費すを最下と為（す）。  
王晳曰く、士卒は殺傷し、城或いは未だ克たず。  
張預曰く、夫れ城を攻め邑を屠るは、惟に師を老し財を費さずも、兼ねて亦害す所のもの多く、是を攻の下と為るもの。  
  
（攻城之法，為不得已。）   
張預曰く、城を攻めば則ち力屈す。必ず攻む所以は、蓋し已むを獲ざるのみ。   
  
（修櫓轒轀，具器械，三月而後成；距闉，又三月而後已。）（[戦車一](http://thnf-web.vm.nthu.edu.tw/history/shows/show01/sung.siege/offence-b02.html)、[戦車二](http://thnf-web.vm.nthu.edu.tw/history/shows/show01/sung.siege/offence-b01.html)、[雲梯](http://thnf-web.vm.nthu.edu.tw/history/shows/show01/sung.siege/offence-b03.html)、攻城術参照）   
曹操曰く、修は治なり。櫓は大楯なり。轒轀（ふんおん）は轒牀（ふんしょう、城門破壊の突撃戦車）なり。轒牀は其の下は四輪、中によりて（入り）これを推して城の下に至る。具は備なり。器械は機關攻守の總名で、飛樓雲梯の屬である。距闉（きょいん）は踴（跳越えるための）土を高く前に積み、以て其の城に附ける。  
李筌曰く、櫓は楯なり、以て首を蒙（おお）いて城の下に趨る。轒轀は、四輪車なり、其の下に兵數十人を藏し、隍（城の前のほり）を填（う）めこれを推し、直（接）に其の城に就（つ）け、木石で壞すこと能ざる所なり。器械は、飛樓、雲梯、板屋、木幔の類なり。距闉は、土木の山で城に乘り（移る）なり。東魏の高歡が晉州を圍み、侯景の臺城を攻むは、則ち其の器なり。役は約三月であり、兵久しくして人疲るを恐るなり。  
杜牧曰く、櫓は即ち今の所謂彭排である。轒轀は四輪車で、大木を排すにこれを為す。上は生牛皮を以て蒙い、下に十人を容す可し。往來して土を運び塹を填め、木石で傷すこと能わざる所、今俗に所謂木驢（木馬）が是なり。距闉は土を積みてこれを為る。即今の所謂壘道（塁道）なり。三月は一時なり。言うは、器械を修治し、其の距闉を更（あらた）むは、皆て須べからく時を經て精好して成就す。恐るらくは人を傷すこと甚し。管子の曰く、「器致ること能わずは困」。言うは、以て敵に應ずこと無し。太公の曰く、「必勝の道とは、器械を寶と為（す）」。『漢書．志』に曰く、「兵の伎巧は、一十有三家、手足を習（練習）し、器械機關を便（鞭撻）せば、以て攻守の勝者に立つ」。夫れ攻城には、撞車、剗鈎車、飛梯、蝦蟆木、解合車、狐鹿車、影車、高障車、馬頭車、獨行車、運土豚魚車が有り。  
陳皥曰く、杜が櫓を稱し彭排と為すは、非なり。是の彭排の若（ごとき）は、即ち當に此の「樐」字を用うべし。曹云うところの大楯、庶（おおよ）そ或はこれに近し。蓋し言うは、器械を全て具（そろ）えるに須く三月を候（ま）つ、距闉も又三月、已に六月を計（かぞ）う。將、此を待たずして忿を生ずが若きは、速にして必ず多く士卒を殺す。故に下に云く、「將、其の忿りに勝（た）えずしてこれに蟻附（蟻のように群がる）す」、災なり。  
杜佑曰：轒轀、上は汾、下は溫。距闉は、踊土を高く前に積み、以て城に附けるなり。土を積みて山と為すを堙と曰く。以て敵の城に距（へだた）りて、其の虛實を觀る。『春秋』『傳』に曰く、「楚の司馬、子反は堙に乘りて宋の城を窺（うかが）うなり」。  
梅堯臣曰く、威と智は以て人を屈すに足らず、已むを獲ずして城を攻む。攻具を治むに須からく時を經るなり。曹公曰く、「櫓は大楯なり。轒轀は轒牀なり。其の下は四輪、中より推して城の下に至る。器械は、機關攻守の總名、飛樓雲梯の屬なり」。櫓を大循と為すと謂ふは非なり。兵の具は甚眾し、何ぞ獨り修大楯と言うや？今、城上の守禦樓を櫓と曰う。櫓は是れ轒牀上の革屋、以て矢石を蔽（さえぎ）るものか？  
張預曰く、修櫓は大楯なり。『傳』に曰く、「晉侯は巢車に登り以て楚軍を望む」。注に云く、「巢車は車上に櫓を為（つく）る」。又「晉の師は偪陽を圍む。魯人は大車の輪を建て、これを甲を以て蒙いて以て櫓と為（す）。左はこれを執り、右は戟を拔き、以て一隊を成す」。註に云く、「櫓は大楯なり」。此を以てこれを觀るに、修櫓は大楯と為すこと明らかなり。轒轀は四輪車、其の下に數十人を覆う可し。土を運び以て隍（ほり）を實（みた）すもの。器械は攻城の總名なり。三月とは約（およ）そ時を經て成るなり。或に曰く、孫子は心忿りて亟（あわただ）しく攻むを戒む。故に權（かり）に三月を以て器械成り、三月にして距堙起（た）つと言う。其の實は必ずしも三月ならず。城尚下すこと能わずんば、則ち又土を積み城と齊（ひと）しくし、士をして卒を上（のぼ）らしめ、或は其の虛實を觀しめ、或は其の樓櫓を毀（こぼ）たしめ、必ず取らんと欲（す）。土山を堙と曰う。楚の子反は堙に乘りて宋城を窺う、是なり。器械成ると言うは、其の久しきを取（か）けて成就すなり。距堙已（すで）にと言うは、其の經時を以て畢（ことごと）く上（のぼ）るなり。皆「已むを得ざる」の謂なり。   
  
  
（將不勝其忿，而蟻附之，殺士三分之一，而城不拔者，此攻之災也。）   
曹操曰く、將忿りて攻器成るを待たず、而して士卒をして城に緣（よ）りて上（のぼ）らしめ、蟻の牆に緣るが如く、士卒を殺傷せしむ。  
李筌曰く、將怒りて攻城を待たず。而して士卒を肉薄して城を登らしめ、蟻の牆に所附く如くして、木石の為（ため）に殺さる所の者が三に一有り。而るに城拔けずんば、此れ攻の災なり。  
杜牧曰く、此れ言うは、敵に辱かしめられ、忿怒に勝（た）へざるなり。後魏の太武帝は十萬眾を率て宋臧質を盱眙に寇す。太武帝は始めに就（ただち）に質に酒を求め、質は溲便（小便）を封じて與う。太武は大いに怒り、遂に城を攻む。乃ち肉薄して城に登るを命ず。分番相い代わり、墜ちては復升り、退く者有ること莫し。屍は城と平らとなる。復（また）其の高梁王を殺す。此の如き三旬（三十日）、死者は過半。太武は彭城が其の歸路を斷つと聞き、疾疫甚だ眾きを見て、乃ち解きて退く。『傳』に曰く、「一女城に乘るは、十夫に敵（あた）る可し」。此を以て校（かむが）えるに、尚不啻（不止）を恐る。  
賈林曰く、但に人心をして外に附せしめ、士卒をして內に離れせしめば、城乃ち自から拔かる。  
杜佑曰く、守ること二時を過ぎ、敵人服さず。將、心の忿に勝（た）えず、多く使士卒をして其の城に蟻附けし、我が士民の三分の一を殺傷せり。言うは、攻趣（攻急ぐ）して拔けずんば、還りて己が為に害す。故に、韓非曰く、「夫れ一戰して勝たずんば、則ち禍暨（およ）ばむ」。  
何氏曰く、將の心忿り急せば、士卒をして蟻の如く緣りて登らしめ、死者は半を過ぎて、城且つ下らず、斯の害や已なり。  
張預曰く、攻めて二時を逾（こ）え、敵猶服さず、將の心忿り躁（さわ）ぎ、持久能わず、戰士をして蟻緣して城を登らしめば、則ち其の士卒は敵人に三中の一を殺さる所と為り、而して堅城終（つい）に拔く可からずんば、茲れ攻城の害や已なり。或に曰く、將の心忿り速（せか）れ、六月の久を俟（ま）たず、而して亟（あわただ）しくこれを攻めば、則ち其の害此の如し。  
  
（故善用兵者，屈人之兵，而非戰也；）   
李筌曰く、計を以て敵を屈す。非戰の屈とは、晉の將郭淮が麴城を圍み、蜀の將姜維が來救す。淮は牛頭山に趨り、維の糧道及び歸路を斷つ。維は大震して戰わずして遁（のが）れ、麴城遂に降る。則ち戰わずして屈すの義なり。  
杜牧曰く、周の亞夫は七國を敵とし、兵を東北に引きて、昌邑に壁し、梁を以て吳を委ね、輕兵をして吳の餉道（しょうどう、軍の糧を運ぶ道路）を絕たしむ。吳、梁相い弊（つか）れて食竭き、吳は遁れ去り、因りて追擊し、これを大いに破る。蜀の將姜維は、將の勾安、李韶をして麴城を守らしむ。魏の將陳泰はこれを圍む。姜維が來救す。牛頭山より出で、泰と相い對す。泰曰く、「兵法の貴は戰わずして人を屈すに在り。今牛頭を絕てば、維は返道無し。則ち我が擒となる。諸軍各（おのおの）守りな戰いそ。其の還路を絕て」。維懼れ、遁れ走（さ）り、安等は遂に降る。  
梅堯臣曰く、戰えば則ち人を傷く。  
王晳曰く、李左車が成安君に說き、奇兵三萬人を以て韓信を井陘に扼（扼殺）すを請うが若き策、是なり。  
何氏曰く、謀を伐ち、交を伐ち、戰に至らずを言う。故に、『司馬法』に曰く、「上は謀りて鬬わず」。其の旨見らる。  
張預曰く、前に陳（の）べる所は、庸（凡庸な）將の為のみ。善く兵を用う者は則ち然らず。或は其の計を破り、或は其の交を敗り、或は其の糧を絕ち、或は其の路を斷つ。則ち戰わずしてこれを服す可し。田穰苴（でんじょうしょ、斉の景公の将軍）が法令を明らかにし、士卒に拊すが若し。燕、晉はこれを聞きて戰わずして遁る、亦是なり。  
  
（拔人之城，而非攻也；）  
李筌曰く、計を以てこれを取る。後漢の酇侯臧宮は妖賊を原武に圍む。連月して拔けず、士卒は疾癘（流行性急性傳染病）す。東海王が宮に謂りて曰く、「今兵を擁して必死の虜を圍むは、計に非ず。圍を撤（撤収）すべし、其の生路を開きてこれを示せば、彼は必ず逃散す。一亭長も擒に足る」。これに從いて、原武を拔く。魏が壺關を攻むも、亦其そ義なり。  
杜牧曰く、司馬文王は諸葛誕を壽春に圍む。議する者の多くは急ぎてこれを攻めんと欲（す）。文王誕の城固く眾多きを以て、これを攻めば力屈し、若し外に救（救援）が有れば、表裏に敵を受けて、此れ危に至る道なり。吾は當に全策を以て縻（武力を用いずに有力者を懐柔）し、坐して制す可し。誕は二年五月反き、三年二月に破滅す。六軍は甲を按んじ、溝を深く壘を高くし、誕は自ら困す。十六國前燕の將の慕容恪は兵を率いて段龕を廣固に討ち、恪はこれを圍み、諸將は恪に急ぎて攻むを勸む。恪の曰く、「軍勢は緩有りて敵に克つ、急有りてこれを取る。若し彼我が勢既に均しく、外に強援有れば、力足りてこれを制す。當に羈縻（武力を用いずに有力者を懐柔）してこれを守り、以て其れ斃れむを待つ」。乃ち築室反耕（房舍を建築し、兵を分けて帰田す）し、嚴しく固く壘を圍み、終に廣固に克つ。曾して血刃せず。  
孟氏曰く、言うは、威刑を以て敵を服し、攻めずして取る。鄭伯が肉袒（上衣を脱ぎ去り、肢体を裸露する。謝罪、敵に恭順）し以て楚の莊王を迎えるが若き類。  
梅堯臣曰く、攻めば則ち財を傷（そこな）う。  
王晳曰く、唐の太宗が薛仁杲（せつじんこう）を降すが若き、是なり。  
張預曰く、或は其の必ず救う所を攻め、敵をして城を棄てしめ、來援せば則ち伏を設けてこれを取る。耿弇が臨淄を攻めて西安に克つ、巨里を脅やかして費邑を斬るが若き、是なり。或は、外に其れ強援を絕ち以て久しくこれを持し、坐して其れ斃（たお）るを俟（ま）つ。楚の師が築室反耕して以て宋を服すが若き、是なり。茲れ皆て攻めずして城を拔く義なり。  
  
（毀人之國，而非久也。）   
曹操曰く、人の國を毀滅（壊滅）せば、久しく師を露（営）せず。  
李筌曰く、術を以て人の國を毀つは、久しからずして斃す。隋の文（帝）が僕射（ぼくや、次官、宰相級）の高熲（こうけい）に陳を伐つ策を問う。熲が曰く、「（長）江の外は、田の收（穫）は中國と同じからず。彼の農時を伺うに、我は正に暇豫（農閑期）にして、徵兵して掩襲（えんしゅう、不意を襲う）せば、彼は農を釋（と）きて守禦す。其の兵を聚（あつ）むを候（うかが）い、我は便ち（兵を）解き退く。再三此若（かくのごと）くせば、彼は農事に疲（労）す。又、南方は地卑（ひく）く、舍は悉く茅や竹（を用う）。倉庫は儲積にして悉く其の間依（もたれかか）る。密に人を行かしめ、風に因りて火を縱（はな）ち、其の營の立つを候いて、更にこれを為せ」。其の謀を行いて、陳始めて病む。  
杜牧曰：敵に乘る可き勢有るに因れば、其の機を失わず、枯朽（枯れて腐った樹木）を摧（くだ）くが如くせよ。沛公が關に入る、晉が孫皓を降す、隋が陳氏を取る、皆てこれを久しくせず。  
賈林曰く、兵は久しくす可からず。久しくせば則ち變生ず。但に其の國を毀滅すも、人に傷殘（受傷残廃「傷つけ、身体障害者とす」）せず。武王が殷を伐ち、殷人が稱し父母と為（す）が若し。  
杜佑曰く、暴逆を誅し理（おさ）め、敵國を毀滅すも、師や眾を暴さずが若し。  
梅堯臣曰く、久しくせば則ち變生ず。  
王晳、梅堯臣が註と同じ。  
何氏曰く、善く攻むは兵を以て攻めず。計を以てこれを困し、其れ自ら拔かしめ、令其れ自ら毀たしむ。勞非ずして久しく守りてこれを取る。  
張預曰く、順を以て逆を討ち、智を以て愚を伐ち、師は久しく暴さず、而して敵國滅す。何假六月之稽乎（どうして六月の計に偽りがあろうか、ない）！   
  
（必以全爭於天下，故兵不頓，而利可全，此謀攻之法也。）   
曹操曰く、與敵と戰わずして必ず完全にこれを得れば、立ちて天下に勝ち、兵を血刃に頓（疲乏）せず。  
李筌曰く、全勝の計を以て天下を爭えば、是以て頓せず利を收む。  
梅堯臣曰く、全きして爭うとは、兵は戰わず、城は攻めず、毀は久しからず。皆て謀を以て敵を屈す。是を「謀攻」と曰う。故に、兵を鈍（鈍滞；停滞缓慢）せずして利は自ら完（完成）す。  
張預曰く、戰わずんば則ち士を傷（そこな）わず、攻めずんば則ち力を屈（つ）くさず、久しからずんば則ち財を費やさず。完全を以て立ちて天下に勝つ。故に、兵を血刃の害に頓すこと無く、而して國は富み兵は強き利有り。斯れ良將は攻を計る術なり。  
  
（故用兵之法，十則圍之，）  
曹操曰く、十を以て敵一ならば則ちこれを圍む。是は將の智勇等しく兵の利鈍が均しければなり。主弱く客強き若きは十を用いず。操(私)が倍兵にて下邳を圍み呂布を生擒（いけどり）せし所以なり。  
杜牧曰：圍は四面壘合す（四方を砦で囲む）を謂う。敵をして逃逸すを得さしめず。凡そ四合を圍むは、敵城を去ること稍（やや）遠く、占したる地は既に廣く、守備すること須（すべから）く嚴しきことが必須であり、若し、兵が多からずんば、則ち闕(欠)漏有り。故に兵を用うこと十倍有り。呂布が敗れるは、是は上下相疑う。侯成は陳宮を執り（逮捕し）布（呂布）に委ねて（曹操に）降る、能く擒る所以。曹公の兵力にして能くこれを取るに非ず。上下が相い疑い、政令一ならざるが若き、設けて圍まざらしめずとも、自ら當（まさ）に潰叛（叛乱離散）す。何ぞ況やこれを圍まん。固（もと）より破滅須（す）べし。孫子の言う所の「十ばらば則ちこれを圍む」とは、是は將の勇智等しく兵の利鈍が均しければなり。敵人が自ら離叛有るを言わず。曹公が倍兵にて布を降すを稱すは、蓋しこれを圍む力を窮むに非ず。此は以て訓ず可からず（教訓としない）。  
李筌曰く、愚智勇怯等しければ、敵に十倍して則ちこれを圍み、攻守勢を殊にす。  
杜佑曰く、十を以て敵一ならば則ちこれを圍之む。是を為すは、將の智勇等しく兵の利鈍が均しきなり。主弱く客勁きが若きは、十を用いず。曹公が、操（私）が倍兵で下邳を圍み、呂布を生擒りせし所以。若し敵が堅壘で固く守り、險阻に依附し、彼が一我が十ならば、乃ち圍む可し。敵が盛と雖、據る所不便にして、未だ必ず十倍ならずしてもこれを圍め。  
梅堯臣曰く、彼が一我が十ならば、以て圍む可し。  
何氏曰く、圍は四面兵を合して以て城を圍む。而して彼我の兵勢を校量し、將の才愚智勇怯等しく、而して我が十倍敵人に勝れば、是十を以て一に對すもの、以てこれを圍む可し。越逸せしむこと無かれ。  
張預曰く、吾の眾敵に十倍し、則ち四面圍合し以てこれを取る。是を為すは、將の智勇等しく兵の利鈍が均しきなり。主弱く客強きが若きは、必ずしも十倍せずしてこれを圍む。尉繚子曰く、「守法には、一にして十に當り、十にして百に當り、百にして千に當り、千にして萬に當る」。守者十人と言うは、圍む者は百人に當る。此と法は同じ。  
  
（五則攻之，）   
曹操曰く、五を以て敵一ならば、則ち三術を正と為（し）、二術を奇と為（す）。  
李筌曰く、五ならば則ちこれを攻む、攻守勢を殊にす。  
杜牧曰く、術とは猶道のごとし。言うは、五を以て敵一ならば、則ち當に己が三を取りて分ち三道を為し、以て敵の一面を攻む。己に留む二は、其れ無備の處を候（うかが）いて、奇に出でてこれに乘る。西魏の末、梁州刺史の宇文仲和は州に據り、代を受けず。魏將の獨孤信は兵を率いてこれを討ち、仲和は嬰城に固守す。信は夜に諸將に令し衝梯を以て其の東北を攻め、信は親（みずか）ら將士を帥（ひき）いて其の西南を襲い、遂にこれに克つ。  
陳皥曰く、兵が既に敵に五倍せば、自ら是我に餘力有り。彼の勢を分つなり。豈に止むや分けて三道を為して以て敵を攻むを？此獨り攻城を說く。故に下文に云く、「小敵の堅は、大敵の擒なり」。  
杜佑曰く、敵兵を幷せ自ら守り、我と戰わざるが若くは、彼が一我が五なれば、乃ち攻む可き戰なり。或は、敵人に內外の應無くば、未だ必しも五倍せずとも然る後に攻む。  
梅堯臣は杜佑が註に同じ。  
王晳曰く、十で圍みて五を取るを謂う。則ち攻むは皆て勢力に餘有りて、其の虛懈を待たず。此れ以下亦謂う智勇利鈍の均しき（場合）のみ。  
何氏曰く、愚智勇怯等しく、我を量りて敵人に五倍多ければ、三分を以て城を攻め、二分は奇に出でて以て勝を取る可し。  
張預曰く、吾が眾が敵に五倍せば、則ち當に前を驚かし後を掩い、東を衝き西を擊つ。五倍の眾無くば、則ち此の計を為すこと能わず。曹公は三術を正と為（し）、二術を奇と為（す）と謂うが、其れ然らずか？若し敵に外援無く、我に內應有れば、則ち須ずしも五倍せずとも然る後にこれを攻む。  
  
（倍則分之，）  
曹操曰く、二を以て敵一ならば、則ち一術を正と為、一術を奇と為。  
李筌曰く、夫れ兵が敵に倍せば、則ち分けて半を奇と為。我が眾彼が寡なれど、動かば制すこと難し。苻堅は淝水に至り、分たずして敗れる。王僧辯は張公洲に至り、分ちて勝つ。  
杜牧曰く、此の言は非なり。此れ言うは、二を以て敵一ならば、則ち當に己が一を取りて、或は敵の要害に趣き、或は敵の必ず救うを攻む。敵をして一分の中、復（また）須ず分ち減らし相救わしめ、因りて一を以て分ちてこれを擊つ。夫の戰法は眾寡を論ずに非ず。陳每（ごと）に皆て奇正有り。人眾を待つに非ず。然る後に能く奇を設く。項羽は烏江に、二十八騎にして尚これを聚めず、猶奇正を設け、循環して相い救う。況や其の他に於いてをや？  
陳皥曰：直に言う、我敵に倍せば、兵を分ち其の必ず救う所に趨く。即ち我が倍は更に倍すに中（あた）り、以て敵の中を擊ちて分かつ。杜（牧）これを得と雖も、未だ其の說を盡さず。  
杜佑曰：己は二敵が一ならば、則ち一術を正と為（し）、一術を奇と為（す）。彼が一我は二ならば、變を為すに足らず。故に疑兵（偽兵）を其の軍より分離す。故に太公曰く、「分移能わずんば、以て奇を語る可からず」。  
梅堯臣曰く、彼が一我は二ならば、其の勢を分かつ可し。  
王晳曰く、分と謂うは、分けて二軍と為し、其の腹背をして敵を受けせしめ、則ち我は一倍の利を得るなり。  
何氏曰：く、敵に倍せば、則ち半を分かちて奇と為。我は眾彼は寡なれば、兵を分つに足る。主客の力均しければ、善く戰う者が勝つ。  
張預曰く、吾が眾が敵に一倍せば、則ち當に分ちて二部と為。一は以て其の前に當り、一は以て其の後を衝く。彼が前に應ぜば則ち後をこれ擊つ、後に應ぜば則ち前をこれ擊つ。茲は所謂「一術を正と為、一術を奇と為」なり。杜氏は兵を分ちて則ち奇と為（す）を曉（さと）らず。聚せば則ち正と為（し）、而して遽（よ）るに曹公に非らず。何ぞ誤れり！   
\*杜牧に対するこの批判は的が外れている。彼は正奇を設けるは衆寡によるものではなく、寡であっても、如何なる場合にも正奇を設けるべしとする主張。  
  
（敵則能戰之，）  
曹操曰く、己と敵人との眾等しければ、善きは猶當に伏を設けて奇とし、以てこれに勝つがごとし。  
李筌曰く、主客の力が敵（対等）せば、惟に善きは戰（善く戦うのみ）。  
杜牧曰く、此の說は非なり。凡そ己と敵人との兵眾の多少、智勇利鈍が一旦相敵すならば、則ち以て戰う可し。夫れ伏兵を設くこと、或は敵前に在り、或は敵後に在り、或は深林叢薄に因り、或は暮夜昏晦に因り、或は隘阨山阪に因りて、敵の不備を擊つは、自ら伏兵と名づけ、奇兵に非ず。  
陳皥曰く、己と敵人との眾寡を料（はか）り相等しければ、先ず奇兵、勝つ可き計を為し、則ちこれと戰う。故に、下文に云く、「若かずんば則ち能くこれを避く」。杜は奇伏を說きて、これを得る。  
梅堯臣曰く、勢力均しければ則ち戰う。  
王晳曰く、能と謂うは、能く士卒の心を感じ、其の死を得て戰うのみ。奇伏を設けて以て勝を取るが若きは、是智優を謂い、兵が敵す（対等）に在らず。  
何氏曰く、敵とは敵と等しきを言う。唯に能とは、戰に勝つ可べきを以てすのみ。  
張預曰く、彼我が相敵せば、則ち正を以て奇と為（し）、奇を以て正と為、變化は紛紜（ふんうん、入り乱れ）し、敵をして測ること莫（な）からしめ、以てこれと戰う。茲は所謂、奇伏を設けて以てこれに勝つなり。杜氏は凡そ陳を置くに皆て奇を揚げて伏に備うこと有るを曉らず、而るに伏兵當に山林に在るを云うは非なり。  
  
（少則能逃之，）  
曹操曰く、壁を高く壘を堅くすは、與に戰うこと勿（なか）れ。  
李筌曰く、量と力とが如かず、則ち壁を堅くして出でずば、其の鋒（鋭い勢）を挫き、其の氣懈（かい、ゆるむ）すを待ち、而して奇に出でてこれを擊つ。齊の將田單は即墨を守りて、牛尾を燒き、即ち騎劫を殺す。則ち其の義なり。  
杜牧曰く、兵が敵せずんば、且（また）其の鋒を避け、當に隙を俟ち、便ち奮決（奮然決断）して勝を求む。能と言うは、能く忿を忍び耻を受くを謂う。敵人が挑（挑発）を求めど出でず、曹咎が汜水の戰に似ず。  
陳皥曰く、此の說非なり。但に敵人、兵が我に倍せば、則ちこれを避くべし。以て其の志を驕らせ、用て後の圖を為す。忿を忍び耻を受くを謂うに非ず。太宗が宋老生を辱め以て其の眾を虜とす。豈に是れ兵力等しからざるや？  
賈林曰く、彼が眾我が寡なれば、逃れ兵の形を匿（かく）し、敵に知らしめず、當に奇伏を設けて以てこれを待ち、詐を設けて以てこれを疑わしむは、亦勝を取る道。又一（ある）に云く、「逃れ兵の形を匿し、敵に備う所を知らしめず、其の變詐（巧變詭詐）を懼れしめば、全軍亦逃ぐ」。  
杜佑曰く、壁を高くし壘を堅くすは、與に戰うこと勿れ。彼が眾、我が寡なれば、敵す可からず。則ち當に自ら逃れ、守りて其の形を匿せ。  
梅堯臣曰く、彼が眾我が寡なれば、去りて戰うこと勿れ。  
王晳曰く、逃は伏なり。能く固に倚り逃げ伏（かく）れ以て自ら守るを謂う。『傳』に曰く、「師、夫人の宮に逃ぐ」。或は兵少なくして以て勝つこと有るは、蓋し將が優れ卒が強きのみ。  
何氏曰く、兵少なく固き壁ならば、變を觀て潛形（形跡を隱蔽）し、見可則進（敵人に戰勝すること可能な時有りと發現せば、就ち迅速に發動進攻す）。  
張預曰く、彼が眾我が寡なれば、逃げ去るべし。與に戰うこと勿れ。是れ亦為すは、將智勇等しく而して兵が利鈍均しきなり。我は治り彼が亂れ、我は奮し彼が怠る若きは、則ち敵眾しと雖、亦以て合戰す可し。若吳起は五百乘を以て秦五十萬眾を破る。謝玄は八千の卒を以て苻堅の一百萬を敗る。豈に須べからく逃ぐるや？  
  
（不若則能避之。）   
曹操曰く、兵を引きてこれを避く。  
杜牧曰：不若と言うは、勢力交援俱に如かず。則ち須べからく速に去り、遷延す可からず。敵人が我が要害を守り、我が津梁（渡し場と橋）を發し、合せて我を圍むが如きは、則ち去らんと欲（す）。復（また）得ざる。  
杜佑曰く、兵を引きこれに備う。強弱は敵（対等）せず、勢は不相若（同じからず）んば、則ち軍を引きて避り、利を待ちて動く。  
梅堯臣曰く、勢力如かずんば、則ち引きて避る。  
王晳曰く、將と兵とが俱に若かず、敵攻に遇えば、必ず敗れる。  
張預曰く、兵力謀勇皆て敵に劣れば、則ち當に引きてこれを避け、以て其の隙を伺う。  
  
（故小敵之堅，大敵之擒也。）   
曹操曰く、小は當に大に能わず。  
李筌曰く、小敵が力を量らず堅く戰わば、必ず大敵が擒（いけど）る所と為る。漢の都尉李陵は步卒五千の眾を以て、十萬の軍に對す。而して匈奴に歿せらる。  
杜牧曰く、堅と言うは、將の性が堅忍にして逃ぐこと能わず、避ること能ず、故に大者の擒る所と為る。  
孟氏曰く、小は當に大に能わず。小國が其の力を量らず、敢えて大邦と讎（あだ）為（す）を言う。權時（時機を斟酌して變通す所有り）城を堅め固く守ると雖、然る後に必ず擒獲さる。『春秋』『傳』に曰く、「既に強きこと能わず、又弱きこと能わずは、敗れる所以」。  
梅堯臣曰く、逃げず避けずと雖、堅きは亦擒らる。  
王晳が注は梅堯臣と同じ。  
何氏曰く、如右將軍の蘇建、前將軍の趙信は兵三千餘人を将（ひき）い、大將軍衛青と分れて行き、獨り單于の兵數萬と逢い、力戰すること一日、漢の兵は且（また）盡きる。前將軍の信は胡人にて、降りて翕侯と為る。匈奴はこれを誘いて、遂に其の餘騎、八百餘可（ばかり）を將い、奔りて單于に降る。右將軍の蘇建は遂に盡きて其の軍を亡（うしな）い、獨り身を以て亡を得て自ら歸る。大將軍は其を正閎、長史安，議郎周霸等に問う。建を何と云わんとす？霸曰く、「大將軍より出でて、未嘗て一裨將も斬らずして、今建は軍を棄つ。斬る可し、以て威重を明らかにす」。閎、安曰く、「然らず。兵法に、『小敵之堅、大敵之擒也』とある。今建獨り數千を以て單于數萬に當り、力戰すること一日、餘士、盡く敢えて二心有らず。自ら歸るを斬れば、是後人に歸意無きことを示すなり」。  
張預曰く、小敵が強弱を度（はか）らず堅く戰えば、必ず大敵の擒とする所と為る。息侯が鄭伯に屈し、李陵が匈奴に降るは是なり。孟子の曰く、「小固は以て大に敵す可からず、弱固は以て強に敵す可からず、寡固は以て眾に敵す可からず」。  
  
（夫將者，國之輔也，輔周則國必強，）  
曹操曰く、將が周密なれば、謀は泄（も）れず。  
李筌曰く、輔は猶助のごとし。將の才足りれば、則ち兵は必ず強し。  
杜牧曰く、才周なり。  
賈林曰く、國の強弱は、必ず將に在り。將が君に輔して才周なれば、其の國は則ち強し。君に輔さず、內に其の貳を懷かば、則ち弱し。人を擇び任を授くに、慎しまざる可からず。  
何氏曰く、周は才智が具わるを謂う。才智周備の將を得れば、國乃ち安んじ強し。   
  
（輔隙則國必弱。）  
曹操曰く、形は外に見（あら）わる。  
李筌曰く、隙は缺なり。將の才備わらずんば、兵は必ず弱し。  
杜牧曰く、才が不周なり。  
梅堯臣曰く、賢を得れば則ち周備わる、士を失わば則ち隙缺す（げきけつ、欠落、完備せず）。  
王晳曰く、周は將が賢にして則ち忠才が兼備すを謂う。隙は缺（か）くる所有るを謂う。  
何氏曰く、言ふは、其の才周（あま）ねかざる可からず、事を用（も）て周知せざる可からずを謂う。故に、將が軍に在れば、必ず先ず五事、六行、五權の用、夫の九變と四機の說を知り、然る後に以て內に士眾を御し、外に戰形を料（はか）る可し。苟も茲に昧（くら）ければ、一日と雖も三軍の上に居る可からず。  
張預曰く、將が周密に謀れば則ち敵窺うこと能わす。故に其の國強し。微かに缺けば則ち釁（きん、すきま）に乘じて入る。故に其の國弱し。太公曰く、「士を得れば昌（さか）え、士を失わば亡（ほろ）ぶ」。  
  
（故君之所以患於軍者三：）  
梅堯臣曰く、君の不知らざる所以を患う。  
孟氏曰く、已下是を語る。  
張預曰く、下の三事なり。  
  
（不知軍之不可以進，而謂之進；不知軍之不可以退，而謂之退；是謂縻軍。）   
曹操曰く、縻は御なり。  
李筌曰く、縻は絆なり。進退を知らずんば、軍は必ず敗れる。驥（駿馬の）足を絆（つな）ぎ、馳騁（ちてい、自由に動き回ること）無きが如きなり。楚の將の龍且は韓信を逐（お）いて敗れる、是其の進を知らず。秦の將の苻融は軍を揮（指揮）し少しく却きて敗れる、是其の退を知らず。  
杜牧曰く、駕御（馬を乗りこなすこと）を縻絆（束縛する）がごときは、不自由にせしめる。君は國君なり。軍に患うとは、軍の患害を為すなり。夫れ鉞を授け凶門（決死の覚悟で出陣）、推轂（すいこく、その地位に就ける）せば、閫外（こんがい、都の外）の事は、將軍がこれを裁く。趙充國が屯田せむとし、漢の宣（帝）必ず决戰せしめ、孫皓が滅ぶ臨みて、賈充が尚班師（軍の帰還）を請うが如きは、此れ進退を知らぬ謂なり。  
賈林曰く、軍の進退は、將が時に臨みて變を制す可し。君命內御（軍の進退を君が命じたり朝廷が統御すること）、患は大なる莫し。故に、太公曰く、國は以て外より治む可からず。軍は以て中（国内、朝廷）より御す可からず」。  
杜佑曰く、縻は御なり。靡は反を為す（靡は縻の逆）。君は軍の形勢を知らずして、中より御さむと欲（す）。故に、太公曰く「國は以て外より治む可からず。軍は以て中より御す可からず」。  
梅堯臣曰く、君が進退の宜を知らずして進退を專（もはら）にせば、是れ其の軍を縻繫（拘禁、捆縛）す。『六韜』に所謂「軍は以て中より御す可からず」。  
王晳曰く、縻は繫なり。此の患を去るとは則ち當に以て不御の權を（将に）託すべし。故に必ず忠才を兼備する臣を將となせ。  
張預曰く、軍が未だ進む可からざるに必ず進ましめ、軍が未だ退く可からざるに必ず退かしめる。是を其の軍を縻絆（びはん、「驥足を絆ぎ、馳騁無き」と同じ）すと謂う。故に曰く、進退、內御に由れば、則ち功成り難し。  
  
（不知三軍之事，而同三軍之政者，則軍士惑矣。）   
曹操曰く、「軍の容（秩序や規律）は國に入れず、國の容は軍に入れず」。禮は以て兵を治む可からず。  
李筌曰く、將を任ずに其の人を以てせず。燕の將慕容評は軍を出し、所在する山泉に因りて樵や水を賣り、鄙を貪り貨を積む。三軍の帥と為りて、其の政を知らず。  
杜牧曰く、蓋し禮度法令を謂う。自ら軍法從事有り。尋常の治國の道に同じくせしめらるが若きは、則ち軍士に惑が生ず。周亞夫（しゅうあふ）が天子に見（まみ）えて拜せず、漢の文(帝)が其の勇を犯す可からずを知り（周亞夫は戦陣においては文帝にも陣中の作法を守らせた）、魏尚（ぎしょう）が雲中を守り、首級を上げ、有司に（弾）劾さる所と為るが如きに至るは、馮唐（ふうとう）の發憤す所以なり（馮唐は魏尚を弾劾した禺を文帝に説き、赦免復職せしめた）。  
杜佑曰く、「軍容不入國，國容不入軍」。禮は以て兵を治む可からず。夫れ國を尚く治むは禮義。兵は權詐を貴しとす。形勢は各異り、教化は同じからず。而るに君が其の變を知らずして、軍國一政とし、以て民を治むを用てせば、則ち軍士は疑い惑い、措く所を知らず（どうしてよいか分からなくなる）。故に、『兵經』に曰く、「國に在りては信を以てし、軍に在りては詐を以す」なり。  
陳皥曰：三軍の事を知らずと言うは、違眾（違背多數）沮議（異義）あること。『左傳』に、晉の彘季（ていき）軍師の謀に從わず稱（挙兵）して偏師（主力軍以外の部分軍隊）を以て先に進み、終（つい）に楚の敗る所と為る。  
梅堯臣曰く、軍を治む務（つとめ）を知らずして其の政に參（あづか）るは、則ち眾惑い亂る。曹公が『司馬法』を引きて曰う「軍容不入國，國容不入軍」は是なり。  
何氏曰く、軍と國と容（秩序や規律）異なれり、治む所各（おのおの）殊（こと、別）にす。欲國を治む法を以て軍旅を治むに以てせば、則ち軍旅は惑い亂る。  
張預曰く、仁義は以て國を治む可し。而るに以て軍を治む可からず。權變は以て軍を治む可し。而るに以て國を治む可らず。理は然り。虢公（かくこう）は慈愛を修めずして晉の滅す所と為る。晉侯は四德を守らずして秦の克つ所と為る。是は仁義を以て國を治めざるなり。齊侯は君子を射ずして晉に敗れる。宋公は二毛（老兵）を擒にせずして楚に衄（じく、敗戦）す。是は權變を以て軍を治めざるなり。故に、仁義に當りて權譎（權謀、詭詐）を用いば、則ち國必ず危し。晉（侯）と虢（公）は是なり。變詐に當りて禮義を尚べば、則ち兵必ず敗らる。齊（侯）と宋（公）は是なり。然り、則ち國を治む道は、固より以て軍を治む可からず。  
  
（不知三軍之權，而同三軍之任，則軍土疑矣。）   
曹操曰く、其の人を得ず。  
杜牧曰く、謂うは、將に權智（権変智略）無くば、軍士を銓度（せんど、人物を選抜して能力を定める）すること能わず。各（おのおの）長とする所を任じて雷同してこれを使（もち）いば、其の材（能力）を盡さず。則ち三軍に疑生ず。黃石公曰く、「善く人を任ずとは、智を使（もち）い、勇を使い、貪を使い、愚を使う。智者は其の功を立つを樂（よみ）し、勇者は其の志を行うを好み、貪者は其の利を邀趨（ようすう、求めて走る）し、愚者は其の死を顧ず」。  
陳皥曰く、將が軍に在りて、權を專制せず、任を自由にせずんば、三軍の士は自然（おのづ）から疑う。  
杜佑曰く、其の人を得ざるなり。君が將を任ずに、當に精擇すべし。將に權變知らざるが若きは、以て勢位を付す可からず。苟も其の人に非らざるに授けば、則ち舉措（きょそ）所を失い（取り乱した振る舞いをする）、軍は覆り敗れる。趙が廣武君を用いずして成安君を用いたが若し。  
梅堯臣曰く、權謀の道を知らずして其の任用に參（あづか）れば則ち眾は貳（二心あるを）を疑う。  
王晳曰く、政なり、權なり。知らざる者を使（もち）いこれに同ずれば、則ち動に違異有り、必ず相牽制す。是則ち軍眾疑惑す。裴度（はいど、群臣は撤兵を進言したが、蔡州叛乱の討伐を奏上した）が監軍（軍事監察官）を奏し去りて蔡州を平（定）する所以なり。此れ皆君(主)が上に由り賢將を專任すること能わず則ち使（もち）うことこれに同じくす。故に通してこれを三患と謂う。  
何氏曰く、兵を用うに權謀の人を知らずしてこれを用いて將と為せば、則ち軍治まらず上は疑う。  
張預曰く、軍吏の中に兵家の權謀を知らぬ人有りて將帥の任に同居せしめば、則ち政令は一ならずして軍は疑う。邲の戰の若く、中軍の帥荀林父（じゅんりんぽ）は還えらむと欲（す）も、裨將（副将）の先縠（せんこく）は從わず、楚に敗れる所と為るは是なり。近世、中宮監軍を以てす（宦官が監軍となった）。其の患は正に此の如し。高崇文（こうすうぶん）は蜀を伐つに、これを罷（や）むに因りて、遂に能く功を成す。   
  
（三軍既惑且疑，則諸侯之難至矣，是謂亂軍引勝。）   
曹操曰く、引は奪なり。  
李筌曰く、引は奪なり。兵は權道なり。處を謬りて使（もち）う可からず。趙の上卿の藺相如（りんしょうじょ）言く、「趙括は徒に能く其の父の書を讀むも、然るに未だ變に合す（臨機応変）を知らず。王が名（声）を以て括を使（もち）いしむは、柱（ことじ）に膠（にかわ）して瑟（しつ）を鼓（こ）すが如し（琴柱を膠で固定すると音調を変えることができない、臨機応変できない）」。此れ則ち「三軍の權を知らずして三軍の任を同じくす」なり。趙王は從わず、果して長平の敗有りて、諸侯の難至（きわま）れり。  
杜牧曰く、言うは、我が軍疑惑して自ら擾亂（騒乱）に致り、敵人を引きて我に勝たしむが如し。  
孟氏曰く、三軍の眾が其の任ぜらる所を疑い、其の為す所に惑えば、則ち鄰國の諸侯は、其の乖錯（混乱、錯乱）に因り、難を作（おこ）して至る。太公曰く、「志を疑わば、以て敵に應ず可からず」。  
梅堯臣曰く、君が徒に其の將を制すを知り、其の人を用うこと能わず、而るに乃ち其の政任を同じくすれば、俾（すべての）眾は疑い惑う。故に諸侯の難が作（おこ）る。是自（おのづか）ら其の軍を亂し、自ら其の勝を去（うしな）う。  
王晳曰く、諸侯己に勝つを引（うしな）う。  
何氏曰く、士が疑い惑えば畏無くして則ち亂る。故に敵國得て以て我が隙釁（げききん、不和）に乘じて至る（攻める）。  
張預曰く、軍士が疑い惑えば、未だ命を用うに肯（がえん）ぜず（命令どおりに動かない）、則ち諸侯の兵は隙に乘じて至る。是自ら其の軍を潰し、自ら其の勝を奪（うしな）う。  
  
（故知勝有五：）   
李筌曰く、下の五事を謂う。  
張預曰く、下の五事なり。  
  
（知可以戰與不可以戰者勝；）  
李筌曰く、人事の逆順を料り、然る後に『太一遁甲』を以て三門遇奇を算し、五將に關格無く、迫脅主客の計は、必ず勝つ。  
\*凡そ事を舉ぐは皆三門に發し、五將に順わんと欲（す）。’三門に發すとは、開門、休門、生門（この三門は吉）。遇は五不遇時「相性の悪い時」。奇は三奇「三奇は必ず時を得地を得る須し、死绝を得ず」。『太一遁甲』に曰く、『三門五将を計法し、主客の成敗則ち知る可し』。『太一遁甲』に云く、『彼来り我を攻む。則ち我を主と為し、彼を客と為す。主は（勝ち）易く客は（勝ち）難し』。迫脅主客は主迫客脅「我が迫り彼が脅（おび）える」か。  
\*陰気太だ盛なれば、陽気栄すること能わず、故に関と曰う。陽気太だ盛なれば、陰気栄すること能わず、故に格と曰う。陰陽ともに盛なれば、相栄するを得ず、故に関格と曰う。関格は、期を尽くすを得ずして死す。『太一遁甲』に曰く、「五将の計、関格掩迫の数を定むを以て、得失知る可し」。  
杜牧曰く、下文の所謂「彼を知り己を知る」是なり。  
孟氏曰く、能く敵情を料り知り、其の虛實を審（つば）ひらかにする者は勝つ。  
梅堯臣曰く、可不可を知るに宜しき。  
王晳曰く、可なれば則ち進み、否なれば則ち止る。勝を保つ道なり。  
何氏曰く、己と敵とを審ひらかにする。  
張預曰く、戰う可きは則ち進みて攻め、戰う可からずは則ち退きて守る。能く攻守の宜を審ひらかにせば、則ち勝たざること無し。  
  
（識眾寡之用者勝；）   
李筌曰く、力を量るなり。  
杜牧曰く、先に敵が眾寡を知り、然る後に兵を起し以てこれに應ず。王翦（おうせん）が荊を伐つに、「六十萬に非ずんば不可」と曰ふが如き是なり。  
杜佑曰く、兵の形を言う。眾有りて寡を擊つ可からず、或は弱を以て強を制す可しとは、變を能くする者が勝つなり。故に、『春秋』『傳』に曰く、「師克つは和に在り、眾に在らず」是なり。  
梅堯臣曰く、力を量りて動く。  
王晳曰く、謂うは、我は敵兵の眾寡に對して、圍む、攻む、分く、戰う、是なり。  
張預曰く、用兵の法、少を以て眾に勝つ者有り、多を以て寡に勝つ者有り。在るは、其の用う所を度（はか）り、其の宜を失わずんば則ち善し。吳子の所謂、「眾を用うは易に務め、少を用うは隘に務む」の如き是なり。  
\*吳子、應變に、『武侯問いて曰く、「若し敵が眾我が寡なれば、これを柰何と為す？」起ちて對えて曰く「これを避くが易し、これを邀（さえぎ）れば阨（や）む。故に曰く、一を以て十を擊てば、善きこと莫（な）く阨む。十を以て百を擊てば、善きこと莫く險（けわ）し。千を以て萬を擊てば、善きこと莫くして阻（ふさ）がる。今、少なき年卒有りて起ち，阨路に金を擊ち鼓を鳴らし、大眾有りと雖も、驚動すること莫し。故に曰く、用眾者務易，用少者務隘」。』  
  
（上下同欲者勝；）  
曹操曰く、君臣欲を同じくす。  
李筌曰く、士卒の心を觀るに、上下欲を同じくし、私の仇に報いるが如き者が勝つ。  
陳皥曰く、言うは、上下共に其の利欲を同じくせば、則ち三軍に怨無く、敵に勝つ可し。『傳』に曰く、「欲を以て人（民）に從うは則ち可なり。人（民）を以て（私）欲に從わせば、濟す（成し遂げる）こと鮮（すくな）し」。  
杜佑曰く、言うは、君臣和同し、勇にして戰えば勝つ。故に孟子曰く、「天の時は地の利に如ず、地の利は人の和に如かず」。  
梅堯臣曰く、心一に齊（とと）のうなり。  
王晳曰く、上下心を一にす。先縠が剛愎以て取敗し、呂布が違異以て亡に致るが若きは、皆上下が欲を同じくせざる所に致る。  
何氏曰く、『書』に云く、「受（紂王）には億兆夷人有るも、心離れ德離れたり。予に亂臣（よく治った臣）十人有り、心同じく德を同じくする」。商は滅びて周興る。  
張預曰く、百將心を一にし、三軍力を同じくし、人人戰わんと欲（せ）ば、則ち向う所前無し。  
  
（以虞待不虞者勝；）  
李筌、杜牧曰く、備預有るなり（左伝、成公九年、「備預不虞、善之大戦也」）。  
孟氏曰く、虞は度なり。『左傳』に曰く、「備えず虞（おもんばか）らずんば、以て師（いくさ）す可からず」。敵之可勝を待つなり。  
陳皥曰く、謂うは、先ず不可勝の師を為して、敵之可勝を待つ。  
『孫子曰、昔之善戦者、先為不可勝、以待敵之可勝、不可勝在己、可勝在敵、故善戦者、能為不可勝、不能使敵之可勝、故曰、勝可知、而不可為』不可勝は敵に勝たせないこと、それは己ができること。可勝は敵のこと。敵に勝たせない備えと虞を以て戦をすれば、敵に勝つことができる。不可為は、敵に勝たせないこと（備えと虞）を忘れ、敵に勝とうとするようなことは為してはならない。  
杜佑曰く、虞は度なり。我が法度の有る師を以て、彼の法度の無き兵を擊つ。故に、『春秋』、『傳』に曰く、「備えず虞らずんば、以て師す可からず」是なり。  
梅堯臣曰く、慎みて非常に備う。  
王晳曰く、我が虞を以て、敵が不虞を待つ。  
何氏曰く、春秋の時、城濮の役に、晉は楚に備うこと無く、以て邲に敗れる。邲の役に、楚は晉に備うこと無く、以て鄢に敗れる。鄢より已來、晉は備えを失わず、而るにこれに加うに禮を以てし、これに重ねるに睦を以てす（礼を以て外交した）。是以て楚は晉に（攻撃を）加うこと能わず。又周末に、荊人が陳を伐ち、吳がこれを救う（救援す）。軍行すること三十里、雨は十日にして夜は星見えず。左史の倚相が大將の子期に謂りて曰く、「雨十日にして夜、甲輯（あつ）め兵聚（あつ）め、吳人必ず至る。これに備うに如くはなし」。乃ち陳（陣）を為す。而して吳人至り、荊を見るに備え有りて反（かえ）る。左史曰く、「其れ反覆すること六十里。其れ君子は休み、小人は食を為す。我、三十里を行きて、これを擊てば必ず克たん」。これに從いて、遂いて吳軍を破る。魏の大將軍、吳に南征し、積湖に到る。魏の將の滿寵、諸軍を帥いて前に在りて、敵と水を隔て相對す。寵は諸將に令して曰く、「今夕、風甚だ猛し、賊は必ず來りて營を燒かむ、宜しく豫（あら）かじめこれに備えを為すべし」。諸軍皆て警（戒）す。夜半、賊は果して十部を遣し來りて營を燒く。寵は掩（不意にむか）えてこれを擊破す。又、春秋に衛人（えいひと）、燕師を以て鄭を伐つ。鄭の祭足（さいそく）、原繁（げんはん）、洩駕（せつが）は三軍を以て其の前に軍し、曼伯（まんはく）と子元（しげん）とをして軍を潛め、其の後に軍せしむ。燕人は鄭の三軍を畏れ、而るに制人を虞らず。六月に、鄭の二公子は制人を以て燕師を北制に敗る。君子曰く、「備えず虞らずんば、以て師す可からず」。又、楚の子重自ら陳（陣）して莒（きょ）を伐ち、渠丘（きょきゅう）を圍む。渠丘の城惡く（欠点があり）、眾は潰（走）し莒に奔（のが）れ、楚は渠丘に入る。莒人が楚の公子の平（へい）を囚（とら）える。楚は入りて曰く、「殺すこと勿れ、吾は歸して俘せむ（捕虜となる）」。莒人はこれを殺す。楚師が莒を圍む。莒の城も亦惡し。庚申に、莒は潰（つい）え、楚は遂に鄆に入る。莒に備無きが故なり。君子曰く、「陋を恃みて（遠く離れた僻地で諸侯の闘争と無縁と）備えざるは、罪の大なるもの。不虞に備豫す（前もって備える）は、善の大なるもの」。莒は其の陋を恃みて城郭を修めず。浹辰（しょうしん、12支一巡、12日）の間にして楚は其の三都に克つは、備無きなり！  
張預曰く、常に不可勝を為して以て敵を待つ。故に吳起曰く、「門を出ずに敵を見るが如し」。士季曰く、「備有れば敗れず」。  
  
（將能而君不禦者勝。）  
曹操曰く、『司馬法』に曰く、「進退は時を惟（おもん）ばかる、寡人に曰（もう）すこと無し」（軍の進退は将が判断し、寡人「諸侯のこと」に相談することではない）。  
李筌曰く、將が外に在りて、君命を受けざる所有るは勝つ、真に將軍なり。吳が楚を伐つ。吳の公子光(闔閭)の弟の夫概（ふがい）王至り、楚の子常を擊つを請うも許さず。夫概曰く、「所謂義を見て行うは、命を待たず。今日我死すとも、楚に入る可し」。其の屬五千を以て、先ず子常を擊ちてこれを敗る。此を審らかにせば、則ち將能くして君は御すこと能わず。晉の宣帝が諸葛を五丈原に拒む。天子は辛毗（しんぴ）をして仗節せしめ（手に天子の符節を持たせ命令として）軍門に曰く、「敢えて問う、戰う者は斬る」。亮は聞きて笑いて曰く、「苟も能く吾を制すならば、豈に千里に戰を請う？（何故戦わない）假言（たとえ）天子許さずとも、武を眾に示すべし。此れ是不能の將なり」。  
杜牧曰：尉繚子曰く、「夫れ將たるは、上は天、下は地に制せられず、中は人に制せられず。故に兵は凶器なり。將は死官なり」。  
杜佑曰く、『司馬法』に曰く、「進退は時を惟（おもん）ばかる、寡人に曰（もう）すこと無し」。將既に精能（極めて有能）にして、兵勢に曉練（通暁鍛錬）せば、君能く專任し、事は中御（殿中省；中御府）に從わず。故に王子曰く、「指授（指示伝授）は君に在り、戰を決すは將に在り」。  
梅堯臣曰く、閫（しきみ、門の扉の止め木）より外は、將軍これを制す。  
王晳曰く、君が能將を御すは、疑忌を絕つこと能わざるのみ。賢明の主の若きは、必す能く人を知り、固より當に任を委ねるに責を以て効成るがごとし。推轂授鉞（車を推し前進させ鉞を授ける；将軍を任命し指揮権を授与する儀式）とは是其の義なり。攻戰の事は、一に以てこれを專（もっぱら）にし、中御に從わず。一威の所以（ゆえ）に、且其の才を盡す。况や敵に臨み機に乘るは、間は髮を容さず（間一髪のこと）、安（いづくん）ぞ遙（中御）よりこれを制す可きや？  
何氏曰く、古は、將を太廟に遣わし、親ら鉞を操（と）り、其の首を持ち、其の柄を授けて曰く、「是より以て上天に至るは、將軍これを制せ」乃ち復柄を操り、刃を授與して曰く、「是より以て下淵に至るは、將軍これを制せ」。故に李牧の趙將と為るや、邊に居りて、軍市の租、皆自ら饗士を用い、賞賜は外に決し、中御に從わず。周亞夫の軍、細柳での軍中では唯將軍の命を聞きて、天子の詔を聞かず。蓋し用兵の法は、一步百變、可と見れば進み、難と知れば退く。而して曰く、王命有らん。是大人（うし、高位者）に以て救火（消火救護）を白（もう）す。未だ及ばずば命に反して煨燼（かいじん、灰燼）すること久し！曰く、監軍有らん。是舍を道邊に作る。謀に適從（適切）無く（無謀な考えで）、而して終に成る可からず！故に能將を御して猾虜を平らぐを責む（狡猾な敵を平定せしむ）は、韓盧（韓の名犬）を絆（しば）りて狡免を求獲せしむ如きと、又何ぞ異なる？  
張預曰く、將に智勇が能有れば、則ち當に責を以て任じて功成るがごとし、中御に從わしむ可からず。故に曰く、「閫外の事、將軍これを裁す」。  
  
（此五者，知勝之道也。）   
曹操曰く、此の上の五事なり。  
  
（故曰：知彼知己者，百戰不殆；）   
李筌曰く、力を量りて敵を拒む、何ぞ危殆有らむや？  
杜牧曰く、我が政を以て、敵が政を料（はか）る。我が將を以て、敵が將を料る。我が眾を以て、敵が眾を料る。我が食を以て、敵が食を料る。我が地を以て、敵が地を料る。校量已に定まれば、優劣短長は皆て先にこれ見（あら）わる。然る後に兵を起こす。故に、百戰して百勝有り。  
孟氏曰く、審かに彼己の強弱、利害の勢を知れば、百戰すと雖も、實（まこと）に危殆無し。  
梅堯臣曰く、彼己の五者を盡くこれ知る。故に敗れること無し。  
王晳曰く、殆は危なり。謂うは、校（かむが）えること彼我が情（情勢）を盡くし、勝を知りて後に戰えば、則ち百戰して危うからず。  
張預曰く、彼を知り己を知るは、攻守の謂なり。彼を知れば則ち以て攻む可し。己を知らば則ち以て守る可し。攻は是守の機、守は是攻の策。苟しくも能くこれを知れば、百戰と雖も危うからず。或ひと曰く、士會（しかい）は楚師の敵とす可らずを察す。陳平（ちんぺい）は劉（劉邦）と項（項羽）の長短を料る。是彼を知り己を知るなり。  
  
（不知彼而知己，一勝一負；）   
李筌曰く、己が強を以て、而るに敵を料らずんば、則ち勝負未だ定まらず。秦主の苻堅（ふけん）が百萬の眾を以て南に伐つに、或ひと謂りて曰く、「彼に人有らむ。謝安、桓沖は江表の偉才にして、輕ろんず可からず」。堅曰く、「我は八州の眾、士馬百萬を以て、鞭を投ずれば江水を斷つ可し。何ぞ難これ有らん！」後に果して敗績すは、則ち其の義なり。  
杜牧曰く、我が強に恃み、敵伐つ可らずを知らずんば、一（ある）は勝ち一は負ける。王猛、將（まさ）に終（臨終）に、苻堅に諫めて曰く、「晉氏、江表に在りと雖も、而るに正朔（天子の統治）禀（う）く所、謝安、桓沖は江表の偉人にして伐つ可からず」。堅は南に伐つに及びて曰く、「吾が士馬は百萬、鞭を投ぜば濟（わた）る可し」。遂に淝水（ひすい）の敗有り。  
陳皥曰く、杜（牧）說は、乃ち是の出兵に名（名分）無く、而して（征伐すべき）罪無きを伐つが所以（ゆえ）に敗れたもので、「一勝一負」の義に非ず。  
杜佑曰く、敵の形勢を知らずと雖も、己が能くこれに克つに恃むは、勝負は各半（五分五分）。  
梅堯臣曰く、自ら己を知るは、勝負半ばなり。  
王晳曰く、但に能く己を計り、敵の強弱を知らずんば、則ち或は勝ち或は負ける。  
張預曰く、唐の太宗曰く、「今の將臣、未だ能く彼を知らずと雖も、苟しくも能く己を知れば、則ち安ぞ不利有りや？」所謂己を知るは、吾が氣を守りて待つこと有る者なり。故に、守を知りて攻を知らず、則ち勝負の半なり。  
  
（不知彼，不知己，每戰必殆。）   
李筌曰く、是狂寇を謂ふ、不敗にして何ぞ待つや？  
杜佑曰：外に敵を料らず、內に己を知らず、戰を用てせば必ず殆し。  
梅堯臣曰く、一に知らずんば、何ぞ以て勝つや？  
王晳曰く、計に全く昧（くら）し。  
張預曰く、攻守の術皆て知らずして、以て戰えば則ち敗れる。  
  
了　2018.04.02　　修正　2020.04.17